
彼に愛の温もりを (始まりの鐘)

シュガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼に愛の温もりを（始まりの鐘）

【Nコード】

N5442T

【作者名】

シュガー

【あらすじ】

「愛の形」の舞台であるジュラル帝国が周辺諸国と合併する前の王国時代のお話です。（200年位前の予定）

周辺諸国との同盟を進めるジュラル王国。ジュラル王国の王は若いながらも才気溢れ、民に敬われる一方で表情に乏しく感情を露わにしないことから「氷の仮面」を持つ王として恐れられてもいた。そんな彼の事情を知る側近は、いつしか彼の氷を溶かすことの出来る女性が現れることを望む。

しかし、側近の思いとは裏腹に貴族たちは欲望のために王に娘を妻

にさせようと躍起になる。

王は、貴族の期待を裏切り、何も持たない子爵令嬢を娶る。

王は言う。

「家族も愛も知らない私が、誰かを愛せる訳がない。」

「王は愛されていますわ。目を凝らせば、すぐ傍に愛というもの
は存在しています。唯、気が付かずに通り過ぎてしまっただけですわ。」

二人は愛を交わすことができるのか。

そして王に愛を教えることができるのか。

第一話（前書き）

「愛の形」より昔のお話です。
他サイトに昔、投降したものです。
続きを書きたくなっていました。
こちらでもよろしく願います。

第一話

「王妃様」

そう呼ばれるようになって一週間……

名前を呼んでいいのは……

愛称で呼んでいいのはこの国で唯一人。

ジュラール国第12代国王フィルディア・ルーガスト・ジュラール

彼が私を名前で呼んでくれる日が来るのだろうか？

彼のことだ。

もしかしたら自分の名前さえ知らないのかもしれない。

誰もが首を傾げた婚姻なのだから。

貴族ではあるが、何の財力も影響力もない子爵家の娘をなぜ陛下はお望みになられたのだろう。私でそう思う位なのだから、誰もが思っているに違いない。

そして有力な貴族の娘達は、嫉妬や蔑む視線を向けた。

そう。自分が王妃になることを彼等は望まなかった。

そのうち陛下も飽きるだろう。

王妃を娶れとせっつく我らに対する嫌がらせに違いない。

陛下が飽きた時、自分の娘を陛下に薦めれば正妃になれずとも国母にはなれるだろうと最初は喚いていたが、その考えに落ち着いて今は虎視眈々とその機会を狙っている。

今は誰もいない後宮が、そのうち色取り取りの華で溢れるだろう。

そうなった時、自分は存在も名前さえも忘れ去られるのだろうか。

それでも自分は笑っていられるだろうか。

母が最後に残してくれた約束を守れないかもしれない。

「クリス、笑って。母様はクリスの笑った顔が大好きよ。ふふっ。母様を…見ている人を幸せにするわ。忘れないで……母様がいなくても強く生きて。」

「母様…」

母様だけだった。

私を愛称で呼んでくれるのわ。

その母様はもういない…

愛されなくてもいい。

ただ呼んで欲しい。

王妃でもクリスティアナでもない。

「クリス」と。

自分は此処に存在していることを誰かに認めてもらいたかった。

夜が更けていく。

今宵は来てくれるのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5442t/>

彼に愛の温もりを（始まりの鐘）

2011年6月7日06時12分発行